

発行日 *** 2013年4月1日 e-mail: akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

皆様からの投稿をお待ちしております

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2-14-3

Tel 072-681-8870

一部50円です



笹部桜

「笹部桜」という品種の桜をご存じだろうか？ いや、水上勉の小説『櫻守』を読まれた事があるだろうか？

J R 福知山線が廃線になった跡地が生瀬から武田尾までハイキングコースになっている。この線路つたいの中ほどに笹部桜が山一帯に群生している箇所がある。一見すると桜木が人の手によって植林されたとは思えないように、山の樹木の中に混生して小さな花びらを開かせている。

この桜を教えてくれたのは、長年の顧客であったKさんである。Kさんのご主人は、水上勉の『櫻守』のモデルである笹部新太郎さんと

は親しい間柄で、笹部さんの死後、笹部桜を守り育てられた人である。西宮のご自宅の広い庭には桜の苗木から成木まで数多くの笹部桜が植えられていたと聞く。その桜を、大切に大切に子を送り出すように各地に寄進された。

笹部桜はソメイヨシノのような大きな花弁をつけず、小さなかわいらしい、山桜を思わせる花をつける。日本古来の上品でどこか遠慮がちに咲く花を求めて、笹部さんが長年研究されそれが実り笹部桜と名がついたらしい。昭和天皇も笹部桜の品ある姿に惹かれ皇居に植えられたという。

『櫻守』を読み、笹部桜のエピソードを聞いた私は、幾度か武田尾に出掛けて満開の笹部桜を見ようとしたが、満開の時期が年によって微妙に違い、咲き始めだったり、散り始めていたりして、未だ笹部桜が山一面を染める風景に出会っていない。広い山の尾根筋に高くそびえる多くの桜をみると、今は故人となられた笹部さんの途方も無い大きなロマンが山一帯に咲き誇っているように感じられる。目先の欲得に一喜一憂する軽薄な生活に埋没している自分が、与えられた場所で何年も何年も咲き続ける桜の一本にも対峙できない人間だと思い知るのである。

4月20日頃に満開の時を迎えるかと予想されますが、ぜひ水上勉著『櫻守』をお読み頂き、笹部さんの夢の桜をお楽しみいただきたくご案内いたします。J R 宝塚線の武田尾駅で下車し、生瀬方面に向かって歩いて頂くと、宝塚市が管理する桜公園があります。公園の山手一面に笹部桜を御覧いただけます。(嘉)

連載 爺捨て山 44

梵店主

先日のニュースで、ガンの名医が不幸にも治療不可能なガンに罹り、治療を拒否し自宅で過されている、と聞いた。記事には、名医は最期を一人で迎えたいとの希望も書かれていた。しかし、病状から考えて世話する奥さんが納得するとも思えない。

孤独死は何か可哀想な出来事、あつてならないことのように言う論調があつて、市役所などが対応に苦心しているようだが、私は首をかしげる。人が自然死と思われる結果としての孤独死を事件のように騒ぎ、病院での死亡を正当な最期とみなす世論に違和感を覚えるのだ。己の死と向きあい迎える場所が一人でもいいのではないかと思っている私なので、彼の思いには激しく同感するである。

生きている時は医者任せ、治療法の同意は家族任せ、死後は、坊さん任せにして、自分で考えようとしなさい。それは死を受け入れる事が怖いのかもしれない、認めたくないのかもしれない。

入院中幾人かの医師に、自分の死に方について考えた事があるか、という私の質問に対して、「そんな事、考えた事ありませんわ」という返事ばかりだった。死が身近な職種に彼にしてそうなのだ。避けられぬ死をもっと受け入れるべきだと思うのだが：

眠れぬ夜

今日は書く種は豊富にある。アレも、コレも…。さて鉛筆をとる。雑音も消去する。電話もケイタイも別室へ移動。腰をすえたが何も思い浮かんでこない。そこへ眠気がさして…。

とても、こりやダメ。昨夜12時まで眠れなかった。フトンにもたれて足を投げ出し、上下にさすってみた。このせいでもなし。こりや朝まで徹夜か、そうだ、薬を飲もう。

こんな苦しみもあるという事を他人は知らないから「元氣ネエ」「失礼だけど年齢は？」なぜ他人の年が気になるのか。私にはわからない。私の身体だって検査を受ければ老化しているのがよくわかるだけに、病院は…と頷いただけで気持ちは動かない。

人はみんな元氣だと思っていられる。「おばあちゃんの声聞いて安心した。会社の休みにゆくからね」と、孫からの電話。こんなものあてにしないこと。ぬか喜びに終ってしまうことが多い。

実を言うと、デパートなんか歩いて、あの生暖かい空気を吸うと心臓が踊る。あわてて救心のみ、外に出て冷たい空気を吸うか、一寸イスに腰をおろす。イスがなければ、心

安い店なら「イス出して座らせて」と頼む。「ああ すいません。店がせまいもんで」とゴタゴタ言い訳が出る。聞く耳もたず「ああ、楽になった イス片付けてネ」サイフの口は開けていない。

身体の変調

どうやら耳も遠くなつたらしい。相手の声量に何かカブさつて遠くにあるようになり、聞こえにくい。聞こえた振りをしているのだから質が悪い。これも此の間の風邪から、こんな状態になつたような気がする。

長男から「なんで、こんな音量にするのか」と注意されること。どうやら耳も大阪辺を歩いているらしい。

それから。正座をしようとすると左膝が痛くてとてもダメ。イスにスタイルのよい二本の足を投げ出している。いろんなところで私の身体はボロボロになりにかけている。

「背中も曲がつていなくて若々しいですネ」とほめてくれる人もいる。長い時間腰をかけていると、ヨイショと自分の掛け声で立ち上がる。

くの字になつた腰をトントンとたたいてムリに姿勢よく見せかけるのも大変なこと。

しみじみ思う。この世には、いろいろな人間がいて、それぞれいろいろに生きているものだなア、と。

あんた アホか…、と文字で書き表わすと、6文字だけど、心の大きな穴が埋まりそうにない。

二週間位、身体の変調に気づき、起き上がれない。そんな事ぐらいで弱音を吐く。アンタじゃない。年齢のせいよ、ひがむな。元気をだしなよ。やがては、ムシヤクシヤ。人の名前が出てこない。

診察室で

サイフ、ケイタイ、メモ帳等の探し物。つまらぬグチと気づかずと同じ話を繰り返すのだ。やっぱり、医者に行こう。診察室に入る。「やあ、久しぶりやね。どうしたん、元気がない。3月ぐらい出会っていないねえ…。今日は、ただごとじゃなさそうね、」と平気な顔で言う。

落ち着け、落ち着いて順を追うて話せ、と自分を叱りつけ、心の中のショックを一部始終が順調に口から流れる。原稿を読んでいても、こんなに途切れもなく流暢に出るだろうか、と思つた位にスーッと涙が流れるのが分かった。

先生も看護婦さんも、時間をさいて、静かに聴いて下さった。待合室はいっぱい。一時間待つて三分か、と怒っている患者の声が耳につく。すまない気持ちで診察室を出る。先生も看護婦さんも同職の立場から、ジャラジャラした慰め言葉も出ないらしい。フーン、フーンとうなづきながら対応して下さった。ありがとう。そして、私の気持ちも静まり、生き返らせてくださつた対応の仕方に、ありがとう。心から礼を言う。

やたらに年齢のせいだとあきらめずに、閉じこもり勝ちの心中を開いてくれる人が大切な宝。

俳句

土田 裕

寒明けや水面に浮かぶ鯉の口
職引きて時間長者の朝寝かな
暮れてなほ明るきところ花菜畑
辛夷咲く友の忌日を諾ひて
初燕いまだがれきの残る街

高槻
J A Z Z
S T R E E T
2 0 1 3

5月3,4日

阪急高槻市駅
J R 高槻駅周
辺
全52会場

《關病記》3

入院1『オセロの如く』

梵店主

「筋炎ではないか」と言うT医師の言葉

に微かな灯りを感じたよっちゃんだったが、大学病院に行ったのは3週間後であった。大学病院は、順番待ち状態で、予約がなかなか取れなかったうえに、よっちゃんの気持ちに病に対するおびえもあって、仕事を休んで直ぐに行かず休みを利用した事情も重なり遅れたのである。

T医師にH大学病院には知り合いの医師がいなかった為、特定の医師への紹介状とはせず、アレルギー科宛に書いてくれているので、どんな医師が対応してくれるのか分からなかったのも不安だった。

外来で初めて診察を担当した医師は若

く三十代半ばの背の高い日焼けした大阪弁が似合う好青年であった。彼は、よっちゃんの話を少し聞き、紹介状をサッと読みながら「これは、筋炎です」と、は

っきりと大きな声で言った。続けて「血液検査から判断して間違いない。こんな事は、医学部の学生でも分かる」確信的に答える医師に対してよっちゃんは「そうですか。しかし、これまで診て貰っていた医師たちは、皆、分かんと言っ

ましたが」というよっちゃんの言葉に、一瞬不可解な表情を見せたが、思い直したかのように「この病気は希な病気ですからね」と返した。彼の説明では、よっちゃんのような男の人で筋炎を患う患者はH大学病院でも年に三人位と大変少ないらしい。

医師「すぐにでも入院すべきなのですが、なにぶんベッドが埋まっていて待つてもらわなければいけません」

よっちゃん「いつ頃になりますか？」

医師「私は、決められません。医局の偉い人が決めますから、2週間後にまた来て下さい」

よっちゃん「わかりました。仕方がないです」

先生とのやりとりによって、よっちゃんの気持ちが揺れた。オセロの石のように黒に白へと変化する自分の弱さを感じた。薬をもらうわけでもなく、治療を受けるでもなく家に帰った。

帰宅後も家内に説明するのも臆するよな投げやりの心理状態で日々を過ごし、二週間後、再びよっちゃんは外来に行った。

病状を説明するよっちゃんの話聞きながら、医師は「私は隔週の担当だから、また二週間後の診察になる。こんな事をしなくてもラチがあかない。早く入院して治療しないと悪くなるばかりだから、上の人に強く言います」医師は続けて「二週間以内

にベッドが空き次第入院してもらいます」

よっちゃん「自営業をしていますので自由はききますが、零細商店なものですから」。入院期間はどのぐらいになりますか。また、病気の治癒する見通しはどうなんでしょうか」

医師「そうですね。まず3ヶ月はかかります。病気が治ることはありません。薬で抑えて病状の進展をおさえ日常の生活が出来るような状態に戻す治療をします。この病気は、原因も分かっています。完全になおる治療方法も確立していません。一部の人は薬が効かない場合もあります。一方の人は、効きます」

よっちゃんは3ヶ月の入院期間の長さには想像できなかった。それは入院しても退院のめどなどつかないように思えたのだ。五割の確立で生きて退院できそうにないような予感がした。商売の事なんかはどうでもよくなり、入院するまでの生活がよっちゃんに残された今生の最期の時間のように思えてきたのである。つまり、オセロで例えれば、打つところがなくて完敗確定。

十日が過ぎた朝、病院から入院日を知らせる電話がきた。ところが、病棟で待っていたのは、オセロで言えば、最終局面で石を一気に裏返す見事な逆転の一手のように、よっちゃんの気持ちを真っ白にする若く美人の担当医だったのだ。

昆虫の視点から見る

熊吾郎

京都のある集会で講師の先生が話されたことで印象に残った言葉である。

カシノナガキクイムシという5mm

ほどの昆虫が1990年ぐらいからミ

ズナラ、クヌギ、コナラ、シイ、カシな

どのドングリのなる木を枯らして大き

な問題になっている。もともと九州など

に生息する昆虫だが、ここではシイ、カ

シなどに穿入し共存しており、枯らして

はいない。温暖化で生息域が北上しミズ

ナラなどにも穿入し、メスのもっている

ナラ菌が繁殖してナラ類の形成層をつ

まらせて枯れるそうである。

ナラ菌は昆虫の幼虫のエサになり、木

の中でオスの掘った木くずに繁殖する。

ナラ類はドングりが野生動物のエサにな

ったり、シイタケの原木や薪や炭にな

ったりして利用されている。この木を枯

らすこの昆虫は害虫として駆除対象で

ある。

人間からは害になる昆虫だが、昆虫か

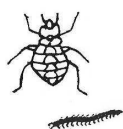
ら見れば人間の活動で温暖化が進行し

生息域を拡大したにすぎない。駆除だけ

では問題は片付かないということだ。こ

の昆虫の活動は温暖化への警鐘と見る

必要がある。



おっちょこちょいぼけ

生まれつき賢かったわけではないのだから、そんなに驚愕しなくてもいいのだが、記憶力がどんどん悪くなっている。

たとえば、上川隆也という俳優さんをご存じだろうか。「たかやと読むのか、りゅうやと読むのか。どっちやろ」と思っていた。別に、この俳優さんが好きというわけではないのだが、何となく。いまだきなんだから、ネットでササッと調べればいいのだが、昭和女（私だけ）はそこまでしない。

そうしたら、先日、テレビで「上川隆也主演の新番組が始まります」と言っているのを聞いた。「ああ、この人の名前、こう読むのか！」と納得した。だが、3日ほどして、「あれ？ 上川隆也って、どう読むんやったやろ？」。テレビで言っていた、ということは覚えているのに、肝心の名前の読み方の方を忘れてる！ これを書いている今も、もちろん、どっちだったか、わかっていない。

まあ、別にどっちでもいいんだけど（上川さんには悪いけど、知り合いつてわけでもないし）。

ちよつと古いが、女優の真野響子と真野あずさ。どっちかが「まの」で、

どっちかが「まや」と読むのだそうだけど、どっちがどっちか、いつもハッキリしない。これまた、別にどっちでもいいんですけどね。

何が言いたいかって？ 新連載なので、タイトルのご説明をしたいのである。生まれつきのおっちょこちょいが、チョイぼけてきましてね、でも、「チョイ」がかけ言葉になっているところが、ちよい、いいでしょ？ みたいな。「みたいな」のところは、懐かしの半クエスチョンでお願いします。

あ、皆さんはもう、半クエお忘れですかね。語尾が上がっていて、妙に、いやらしいんですが、なぜか、いっとき流行りました。ほんと、流行りって、意味わからん。話を戻そう。

おっちょこちょいの方は、筋金入り。そのために、たくさんのお金をムダにし、人に小バカにされ、あきられ、あきらめられて生きてきた（涙）。

たとえば、仕事で鳥取の米子に行ったとき。岡山から中国山地を越えて行くのだが、列車は午前中、1時間とか2時間に1本しかない。約束の時間にぴったりの特急の座席におさまって、私はほつとし、心地よい揺れにまどろんだ。そして、ハツと目が覚めたとき、

米子を過ぎちゃっているではないか！ 私は、次の停車駅でとにかく降りることにした。戻るしかない！ 人っ子一

人いない、田舎の駅。改札口まで走って、駅員さんに聞いた。「米子に行く電車は、何分発ですか？ 何番線？」。駅員さんは、げんそうに、「いま、行った電車が米子行きですけど？」。その電車から飛び降りて、「米子行きは？」と叫ぶ、あほ女。

はつきり言うのと、寝ぼけてカン違いしてしまったのだ。行き過ぎたのではなく、まだ、米子の手前。黙って乗っていれば、米子に着いたのに……。

次の列車は、1時間半も先。それを待っていたら、約束の時間に間に合わない。私は駅前にあった、小さなタクシー会社に飛び込んだ。昭和の香りがぶんぶんする、平屋のタクシー会社。車が2、

3台入る土間みたいなスペースの奥に事務所らしきところがあつて、そこからのつそりとおっさんが出てきた。「米子まで？ いいけど、山越えて行くけん、メーター1万5、6千円ですよ」。

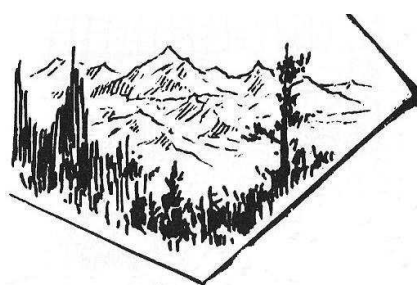
もつと田舎弁だったが、まあ、そういうことを言った。慌ててはいたが、「よさそうなおっさんでよかった！」と思っ

た。この際、金額どうのこうのは言ってもらえない。米子に行けるか、どうか。約束の時間に間に合うか、どうかだ。そんなに、切羽詰まった状況になったのも、ウトウトして、乗り過ごした、とカン違いして、いくつか手前の駅でちよこちょい

が原因だ。下りてしまったという、ささいなおつマヌケである。でも、この瞬間においては、おのれのマヌケを呪っているヒマはない。

タクシーで山道をうねうね走って、米子まで、1万6千円。もちろん、自腹。会社が出してくれるのは、大阪―米子間のJR料金のみ。一応、領収書をもらい、社長にらむ。

米子のいくつか手前の（名前も忘れた）駅前のタクシーの運転手さん（いい人だったからよかったが、もし、山の中で、バックミラーに写る乗客（私ですよ、わたし）の美しさに幻惑され、つい魔がさして殺害ということだつて、あったかもしれないのだ。それで、その辺の森林にぽいっと捨てられていたら、まあ十年は見つけてもらえなかっただろう。だって中国山地だから。横溝正史のおどろおどろしい小説の舞台となった、八つ墓村のある……。しかも、私がそこでタクシーに乗っていた



ことなんて誰も知らないのだ。私の死体は、確実に白骨化していたはずだ。

そもそも、私が行方不明になっても、警察がそんなに真剣に探してくれるとも思えない。大阪駅で特急に乗ったことぐらいは判るかもしれないが、降りたのは無人に近い駅、防犯カメラなんてなさそうだったし。幸い、運転手さんは性格も目もよかったので何事もなく、白骨化するまで、かなり日にちがかかりそう、ふくよかなボディとなる今日まで元気である。

だが、おつちよこちよいが危険であることは、つい最近も痛感した。私の住むマンション（正確にはアパートというべきだろうが、まあ、オマケしなくてもらおう）のエレベーターには、なぜか大きな鏡がついている。私は、そのエレベーターの鏡で身だしなみを整えるようにしているのだが（全身が写る大鏡がうちにはない。ない方がいい。あつたら、毎日、絶望する。6階から1階に下りるまでぐらいの時間なら、絶望まではしてられない）、先日、その鏡の前で、花粉症よけの帽子のひさしをまつすぐにしようとして、自分の指先で目を突いてしまった。我ながら、ありえないシチュエーション。でも、角膜が、痛っててっ！。おつちよこちよいには、失明の危機まで、はらむのだ（AO）

石の声を聴け

大江雉兎

響きが似ていても『風の歌を聴け』のパロディではない。あるいはこんなタイトルを掲げるとスピリチャルなものを連想する人がいるかも知れないが、パワーストーンも出てこない。出てくるのは石碑であり、松尾芭蕉である。

松尾芭蕉の『奥の細道』は幻想の旅だったという。旅の途次、各所での思いを綴った紀行文、俳文との体裁をとっているが、実際に芭蕉が歩いた行程と『奥の細道』の中で文章化されている足跡とは重ならないらしい。その意味では『奥の細道』は大いなるフィクションだったということもできる。だが、そのことは『奥の細道』を貶めることにはならない。むしろイメージ世界より紡ぎ出された言葉の結晶として、その完成度の高さこそが注目される。

「さて義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の叢となる。国破れて山河あり、城春にして草青みたりと笠うち敷き時のうつるまで涙を落とし侍りぬ」。杜甫の「春望」を介在させながら「夏草やつはものどもが夢の跡」の句を導く一節である。芭蕉と曾良が平泉を訪れているのは間違いないが、

曾良の日記に見られる淡々とした記録と『奥の細道』の文章との隔たりは大きい。実際に現地を訪れ、その場で思ったことを書き記したといったレベルのものではなく、探訪の経験が胸中で練り直されたのちにはき出されているのが、かの名文なのである。他にも、曾良が残した記録を参考にしながら『奥の細道』の文章を読むと、結晶度の高い言葉がここかしこにちりばめられていることがわかる。

そうした事例を並べてみるのも面白いのだが、今回は「石の声」というタイトルを掲げ、石碑に刺激されて空想がたくましくはためいたケースとして「佐藤庄司の旧跡」の段を取り上げてみる。佐藤庄司こと基治は奥州藤原氏

の家臣。源義経に従って奮闘した継信・忠信兄弟の父で、佐藤庄司旧跡は旅が瀬上の宿（現在の福島市瀬上町のあたり）にさしかかったところに登場する。「是庄司が旧館也。麓に大手の跡など人の教ゆるにまかせて涙を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中

にも二人の嫁がしるし先哀也。女なれどもかひがひしき名の世に聞えつる物かなと袂ぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらず。」

この場面は曾良の日記にも記録があり、芭蕉たちが現地を訪れていることは確かめられる。また「かたはらの古寺に一家の石碑を残す」というのも、曾良がいうところの「堂ノ後ノ方ニ庄司夫婦ノ石塔有。堂ノ北ノワキニ兄弟ノ石塔有」云々と符合する。佐藤一族の菩提寺である医王寺に足を運び、境内の供養塔を見て伝説の主人公に思いを巡らせたのである。続く「中にも二人の嫁がしるし」については潤色が含まれるようだが、注目するのは眼前の供養塔から「墮涙の石碑」にまで及んでいる点である。

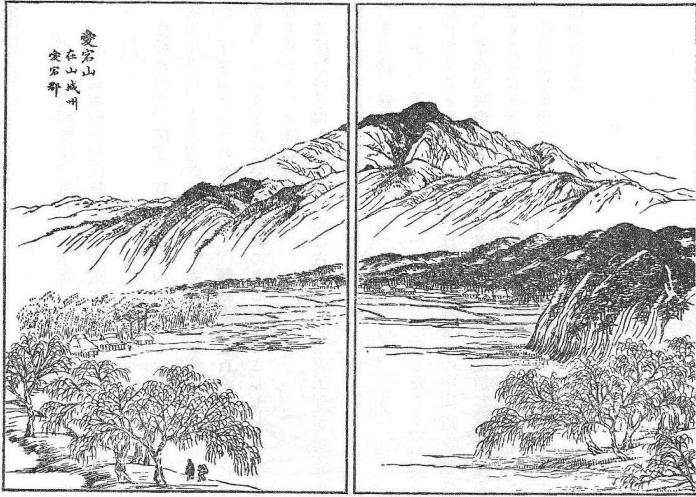
「墮涙の石碑」は「羊公碑」ともいう。三国志に登場する晋の武将羊祜の顕彰碑で、遺徳を偲ぶ人々が碑の前に涙したことが名前の由来。そのエピソードは唐詩にもたびたび引かれており、日本でも広く知られていた。『奥の細道』は、佐藤一族の菩提寺において継信・忠信兄弟の奮闘やその死を悲しんだ母のエピソードが涙を誘い、さながら墮涙碑のごとしといった文脈でまとめられている。

さて翻って現代的な観点でこの一節を読み直してみる。すると墮涙碑は言うに及ばず、佐藤一族でさえ影が薄くなっていることがわかる。結果、想像力の飛翔も「平



泉」の段ほどの鮮やかさは感じられない。しかし鮮やかさの欠落は芭蕉の責任ではあるまい。鍵となるエピソードから遠のいてしまった現代人の悲しさなのである。芭蕉の中では、眼前の石碑を契機としてイメージの世界が大きく広がっている。それは石の声が芭蕉の耳に届いたからに他ならない。

先日、愛宕山に登る機会があった。愛宕神社表参道の往復だったが、下りてきて渡猿橋の近くに梅の花が咲いている場所があった。ご年配の方を案内してのことだったので、ちょうどいいかと思つて記念撮影を勧めてみた。そして、もののついで程度のノリで傍らの徳富蘆花「自然と人生」碑を紹介し



たところ、思いの外、喜んでくれた。

なんでも「僕らの世代なら蘇峰や蘆花は特別だから」とのこと。ご年配とはいえリアルタイムで徳富兄弟を知っているとも思えないのだが、徳富兄弟は昭和三十年代ぐらいまでなら幅広い層からの支持があったのだろう。四十年代や五十年代でいえば亀井勝一郎だったり小林秀雄だったりポジションに徳富兄弟がいたということか。当方ですれば知識として知っているに過ぎない蘆花碑だったが、その方には琴線に触れる何かがあったようだ。「石の声」に引きつけて言えば、当方には届いていなかった声がその方には聞こえたのである。

清滝の蘆花碑に限らず、京都には面白い石碑がたくさんある。歴史関係の記念碑や歌碑・句碑など文学関係のもの、あるいは生活史的な色合いが濃い石碑もある。最近では愛宕灯籠に興味をもっているのだが、石碑の概念を少し広げれば、あれも生活史的な石碑のうちに含めることもできるだろう。

【告知】四月十三日に「石工と花売りの里・北白川をめぐる」と題して街歩きツアーを実施します。文学碑や石造記念碑に関心のある方はぜひご参加ください。お申し込みは「まいまい京都」

<http://www.maimai-kyoto.jp/>で。

私の海外経験 17

豪州時代 1 (’86年10月～’90年5月)

土田 裕

新しい着任地

一九八六年(昭和六一年)一〇月、三度目の海外勤務地であるシドニーに着任した。

一九八四年一月にシカゴから三井物産本社の物資部に帰任して二年九カ月しか経っていないだったので、私にとっては意外な人事であった。当時、私は四六歳、役職は部長代理、職務は医療機器グループの主席として四年前に出来たばかりの新しいグループの黒字化を達成し、これから物資部の稼ぎ頭になろうとしていた時だけにやり残した案件は多々あり、後ろ髪を引かれる思いであったが、社命とあれば断ることもできなかった。

シドニーには豪州三井物産本店があり、私の職責は物資・木材・繊維部部长であった。過去二回の勤務地には転勤前に出張の経験があり、どんな所か多少なりとも知っていたが、豪州は出張したこともなく、日本で豪州向け商いを担当したこともなかった。

飛行機がシドニー空港に近づくにつれ入り組んだシドニー湾の真つ青な海、ユーカリの薄緑の中に赤い屋根が点々と見え、サンフランシスコ、シンガポールと並ぶ世界三大美港はさすがに綺麗であった。

オーストラリアは日本の二倍の広大な国土を持つが、人口は二二〇万人で日本の五分の一である。

一七七〇年にスコットランド人ジェームス・クックがシドニーのボタニー湾に上陸してから英国人の入植が始まり、最初の入植者一〇三〇人のうち七三六人が犯罪者で英国の流刑植民地であった。一九〇一年に英国から独立したが、現在でも立君主制、連邦制をとっており、君主はエリザベス女王である。

六つの州といくつかの特別行政区からなる。広大な国土だけに赤道に近い北部は亜熱帯で年中暑く、タスマニア州等の南部は日本の北海道のような気候で雪も降るが、シドニーのあるニューサウスウェールズ州は年中温暖で、平均温度は一五―二〇度Cである。南半球の四季は日本とは逆で一―二月が日本で言う夏、三―五月が秋、六―八月が冬、九―十一月が春の気候となる。着任当初は一二月の暑い盛りにジングルベルが街に流れていることに違和感を覚えた。

シドニーの人口は四三〇万人で豪州最大の都市、二位のメルボルンが三八〇万人、前者は金融の中心、後者は産業の中心である。

豪州物産はシドニー以外にメルボルン、パ

ース、ブリスベーンに店を持ち、広域部制と称してそれぞれの部が四つの店の部門商売を管轄していた。従って私は物資、木材、繊維に関しては四つの店の商売を管轄する立場にあった。

豪州人気質

豪州といえば「白豪主義」と称して一九七三年の移民法成立まで移民を制限していたが、人口減少を回避するため、この年から移民を奨励するようになった。現在ではアメリカ合衆国と同様に人種のるつぼとなり、世界一二〇国からの人種が集まっている。

日本からの観光客が多いせいもあって日本人には非常に親切であった。市内の免税店の客の半分以上は日本人で、店員には必ず何人かの日本人を雇っていた。豪州の輸出品は石炭、石油、鉄鉱石、肉、ウッドチップなどの天然資源であるが、いずれの商品についても当時、日本が最大のお客で、日本が不景気になると豪州も不景気になる、と言われていた。最近是中国が高度成長で石炭などを高値で買いあさり、豪州にとっても中国が最大のお客になったようである。

豪州人は「Ausssi オージー」と呼ばれ、体格は大柄、性格は陽気でアバウトな人が多い。自営業や経営者は別として、一般のサラリーマンはあくせく働かず定時に退社し、庭仕事やテニス、水泳などの

スポーツに精をだす。人口が少なく、国内需要に限度があるので、設備産業が育たず、自動車、電機製品などは殆どが輸入品で、台湾、中国製品に対する抵抗感も全くなく、安物が街に氾濫していた。

同じ英語でも日常の挨拶は米国とは違った表現・発音となる。「Good day Mate!」は「グダイ、マイト」と発音する。英国の「マイト」同様、Aを「アイ」と発音するのでMateはマイトになる。

年金制度が充実しているので五〇歳半ばで引退して悠々自適の生活を送る人が多い。私の部下で繊維を担当していたA君は五五歳で引退、スーパーアニュエーション（退職年金）で家を買換えると言っていた。これは雇用者が被雇用者のために給与の9%を積み立てる制度で、当時シドニー郊外の戸建住宅は二〇、三〇万豪ドル（当時は一豪ドル、九〇円）で買ったが、それにしても三〇年勤めて退職金三〇万ドル（二七〇〇万円）貰えるのだから豪州の福祉は充実していた。

社宅

私が着任した一九八六年、日本はまだバブル景気に沸いており、豪州物産も日本向け鉄鉱石、石炭、天然ガス、ウッドチップなどが好調で業績は大変良かった。

当時のS社長の発案で邦人社員全員の社宅を会社で買うことになり、私もシドニー郊外、East Killaraにある一戸建に同居

した。敷地は一〇〇〇M2、住宅部分は三〇〇M2でプールもついていた。屋内にはサウナ、ビリヤード台もあり、広さだけをみれば豪邸のようであるが、築一五年で内装などの作り

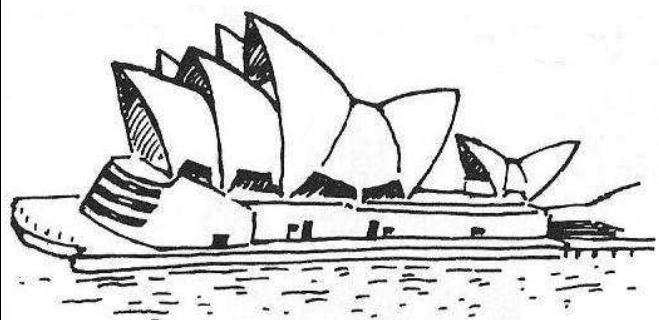
方は雑で豪州では中流家庭の家であった。会社は三〇万豪ドル（約二七〇〇万円）で買ったそうだが、日本なら当時は一億円だしても買えなかったと思う。

豪州の住宅が安い理由は、市街地は別として郊外の土地の値段が非常に安く、建物の価値が価格を左右するからである。日本の場合、一五年も経てば建物の価値は極端に下がるはずだが、煉瓦づくりの豪州の家は殆ど下らないとのことであった。不動産屋の宣伝でも家の広さ（4ベッドルーム、キッチン、リビング付など）は書いてあるが、土地の広さは全く書いてないのが一般的であった。

私の社宅は斜面に建っており、道路に面している部屋が二階で裏庭に面している部屋が一階であった。庭の最上部にプール、その下斜面にはレモン、ブルーゲンビリアの木があり、女房は庭で採れたレモンで果実酒を作っていた。三井物産の他の海外店では社宅は賃貸であり、現地法人が一般社員用の社宅を海外で買ったの

はこれが最初であった。豪州も当時は不動産バブルで住宅価格が毎年値上がりしていたので、約二〇件の社宅を所有することは資産価値としてもかなりのものであった。

拙宅の庭は広大な森林につながっており、休みの日にはユーカリの林を散歩した。ただ森林が近いせいか庭に蠅や蚊が大量に発生し夏の夕方など、うかつに外で長居すると蚊に噛まれてひどい目にあうことになる。プールも子供たちには好評だったが、放っておくと落ち葉が沈んだり、水が汚れるので、毎日、自動清掃機を動かしたり浄水剤を入れたりメンテナンスに手間がかかり、引退した人なら面倒みられるが、現役の日本の駐在員には無用の長物でもあった。庭も広くて個



人では手入れできないので毎年、庭師を頼んで芝刈や樹木の剪定をしてもらった。

物資・木材・繊維部

豪州三井物産の主要取扱商品は鉄鉱石、石炭、液化天然ガス（LNG）などの資源、原料であり、我々の部の取り扱いには豪物全体の二割にも満たず、残念ながら利益貢献度は低かった。当部の邦人社員はシドニー二名、メルボルン二名、現地社員はシドニー四名、メルボルン五名であった。

部長の私はシドニー本店に駐在しているのだが、売り上げの七〇％はメルボルン店で挙げていた。理由は前述の通り、シドニーは金融の中心で銀行、保険会社などの本社はあるのだが、我々のお客である大手メーカーはメルボルンのあるビクトリア州に集中していたからである。シドニー店の主要商品は、自転車、天井版、コンベアーベルト、繊維原料（糸、布）など小口の商売が多く、シドニー店単独では赤字であったが、当部がかなりの利益を挙げていたのは全てメルボルン店のお蔭であった。

メルボルンの主要商いはウッドチップ、木材製材、冷蔵庫用コンプレッサー、繊維原料であったが、中でもウッドチップは年商1億豪ドル強で、メルボルン店全体でも最大の商売であった。供給

元は2社あったが、八〇％はタスマニア島産でユーカリを粉碎乾燥の上、満船チャーターで十条製紙（のちに日本製紙）に納入していた。ユーカリの木は十五―十八年位で成木になるが、大半の種類が柔らかく内部が空洞になるので建材には不向きで紙の原料として利用されている。本社の紙パルプ部にとつても重要商売で専任担当者の〇君が派遣されていた。同君は月に一、二回、チャーター船がタスマニアに到着するたびに現地へ飛び、一週間―十日くらい荷役、品質検査に立ち会っていた。

私も、十条製紙の社長以下幹部がお見えになる時はタスマニアの工場まで同行し、アテンドした。タスマニアノ工場の親会社はノースブローケンヒル（NBH）で、社長は英国人だったが、所謂イギリス語は大変聞きにくく、表現が豪州英語と異なり難解で、パーティーで十条社長への通訳をした時はしどろもどろになり恥をかいだ。

シドニー店の自転車の商売は、香港のホンコン・バイシクル・カンパニー（HBC）から完成車を輸入し、シドニーのアポロ・バイシクル社へ納めていた。後にアポロ社長のジョンキャロル氏が引退、会社をHBCに売りたいと言いついて、HBC、豪物・香港物産の合併会社に衣替えすることになった。

た。シェアは一五％で僅か二十万豪ドル（一八百万円）の投資であったが、非鉄部門出身の豪物社長の許可がなかなか下りず大変苦労した。

岩綿吸音天井板は、オフィスなどの天井に張るもので市場規模が小さい豪州では国産がなく日本から輸入していた。これは非常に嵩が張り運賃が高く、他の国なら国産に勝てないのだが、豪州には岩綿のメーカーがないので輸入していたものである。

コンプレッサーは松下のシンガポール工場から輸入し、メルボルンのフイリプス社の冷蔵庫工場へ納めていた。豪州は人口が少ないので、電気製品なども国産では採算が合わず殆ど輸入品であったが、さすがに冷蔵庫のような大型家電は輸送費が高く、数社が組立工場をもつて国産していた。扇風機なども国産がなく、以前は松下の扇風機を輸入販売していたのだが、台湾製に価格で対抗できず、私が赴任した時はその商売は無くなっていた。

シドニー近郊の家でエアコンを装備している家はほとんどなく、夏は一時的に扇風機が必要なので私もスーパータで台湾製を買ひ、帰って組み立てようとしたら羽根が壊れているのでスーパに取り換えに行ったら、同様のことが度々起こっているらしく、箱も開けずに黙って取り換えてくれた。

なんとなく京都へ

四十年近く住んだ京都を離れ、信州にすっかり住まいを移したのは、一年半前である。その後借りていた駐車場も三月で解約した。京都に引つかかるものはないが、ふた月に一度は京都に足が向いてしまう。叡山を望むと、京都に帰ってきたんだという安堵感がわくのだ。

信州発の夜行バスは明け方の五時半頃、京都駅に着く。三月下旬、薄暗いが、少し歩こうと思ったつ。

烏丸通をしばらく北に進むと、左手に東本願寺が重厚に構えている。門が開いていたので中に入ると、阿弥陀堂にシートがかぶされ、修復中であった。御影堂といい、阿弥陀堂といい、この巨大さは教団の大きさをあらわしている。

案内板によると、今年は教如の四百回忌法要が行われるそうだ。教如はお東の開祖であるが、なにも本願寺を東西に分立しようという意思があったわけではない。そもそも宗祖の親鸞も、師の法然と袂を分かつて、新たに浄土真宗という宗派を立てたわけではない。

烏丸通をはずれて狭い通りにはいると、雰囲気が変わる。京都には狭い路地のいたるところにお地蔵を見かける。通りがかったおばあちゃんが立ち止まって手を合わせる。称名も題目もない、このサイレントな振る舞いがいい。（猿）